



2024年度 小学校英語教育センターシンポジウムの報告

令和6年度の小学校英語教育センターシンポジウムが、2024年10月19日（土）に鳴門教育大学にて行われました。今回は、全国の小・中学校の外国語科において、令和6年度からデジタル教科書を用いた授業が本格的に進められているという状況を鑑み、「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を図る外国語科の授業づくり—教科の特性を生かしたICTの活用を通して—」をテーマとしました。同テーマのもと、関西外国語大学教授の直山木綿子先生による基調講演、小学校外国語教育に様々な立場で取組を進めておられる先生方（徳島県教育委員会（指導主事）の田渕由起子先生、北島町立北島小学校（教頭）の坂田美佳先生、宮崎市立西池小学校（指導教諭）の岩切宏樹先生）による先駆的なお取組の実践報告を通して、昨今の動向を学ぶとともに、ご登壇の先生方とフロアの皆さまと外国語科の授業づくりについて検討することをシンポジウムの趣旨としました。



【直山木綿子先生】

また、本センターが、令和5年度より、公益財団法人教科書研究センターと連携し取り組んでいる学習者用デジタル教科書を用いた小学校外国語科の授業のあり方に関する研究の勉強会を兼ねた内容としました。昨年度同様、会場での対面参加とオンライン参加のハイブリッド形式で開催し、県内外の現職教員、教育関係者及び学生など計145名（来場者47名とZoomでの視聴98名）の方々にご参加いただきました。

以下、本シンポジウムを通じて個人的に学ばせていただいたことを述べさせていただきます。まず、本シンポジウムのテーマは簡潔に申し上げますと「ICTの活用を通じた授業づくり」ではありましたが、ICTの活用は教育や学びの手段であり、その活用以前に、学校教育の目的や外国語の授業の主旨をしっかりと理解する必要があるということです。したがって、私たちは、その目的や主旨を常に確認する必要があると考えます。次に、教師は、外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせる言語活動に、児童が「自分事」として向き合えるように導く必要があるということです。外国語の学びが「自分事」にならなければ、当然児童の見方・考え方は働くことにはなりません。なかなか難しいことであると考えますが、それを実現するためには、教師は、言語活動の中で、児童と丁寧に対話を重ねながら児童の思考とともに外国語（英語）を紡いでゆくことが求められます。外国語科では「主体的・対話的で深い学び」は言語活動においてのみ導かれるということと言い換えることができるかもしれません。そこに外国

語科の特性があり、また、そのように児童を導くところに、教師に求められる役割があると考えます。シンポジウムの最後に、教育のDXが求められる今日、学びの主導権を個々の児童に委ねる「複線型」の授業の、外国語科における可能性について取り上げられましたが、今回のシンポジウムを通して、そのような外国語科の特性をふまえながら、ICTを活用した授業づくりの在り方についてさらに検討していく必要があると考えさせられました。



【パネルディスカッションの様子】

最後に、本シンポジウムは、公益財団法人教科書研究センター様よりご協賛をいただき、また、多くの関係機関様よりご後援をいただきました。この場をお借りし、深く感謝の意を表します。そして、本シンポジウムにおいて貴重な情報をご提供くださったご登壇の先生方をはじめ、多くのご意見とご質問をお寄せくださったご参会の皆さまに心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

（小学校英語教育センター所長・教授 山森 直人）



宮崎県小中学校外国語科ICT活用指導力向上研修会にて発表



本センターは、令和7年2月20日（木）に開催された「宮崎県小中学校外国語科ICT活用指導力向上研修会」で、これまで推進してきたデジタル教科書調査研究事業について、成果と課題を発表しました。平日にもかかわらず、同研修会には、宮崎県内の小学校、教育委員会等から39名の参加があり、関心の高さが伺えました。

今回、発表した内容は、令和5年度（1年次）に実施したアンケート調査（附属・公立小学校44校（A市13校、B市30校、その他1校）の教員57名と児童1,767名を対象）の結果と協力校における試行授業からうかがえる学習者用デジタル教科書の使用の現状、そして可能性と課題についてです。加えて、2年次に進めている「児童にゆだねる授業の在り方」についての進捗状況も報告しました。



【協力校の授業の様子】

40分間の発表後には質疑応答の時間があり、そこでは、「チャンツの利用の仕方」や「書き込んだものの記録の仕方」等、学習者用デジタル教科書の使用方法を中心に質問が多く寄せられました。その後、ブレイクアウトルームに分かれ、使用している教科書会社の担当者と現場の先生方との意見交流会へと続けました。

研修会を通して、宮崎県の先生方から、学習者用デジタル教科書に関するお悩みやご要望、ご意見など、貴重なお話を伺うことができ、実り多い時間となりました。こうした機会を設けてくださった宮崎県教育庁様に感謝するとともに、いただいた学びを今後の実践研究に生かし、多くの皆様に還元してまいります。

（特命准教授 佐藤 美智子）

2024年度 ポットラックセミナーの報告



令和7年3月1日（土）、本学にて、「小学校外国語科の新しい授業のカタチを探る—ICTの効果的な活用から—」をテーマに、ポットラックセミナーを開催しました。30名を超える皆様からお申し込みをいただき、共に考える時間をもつことができました。

セミナー前半では、まず、名東郡佐那河内小学校の堀井晴美先生から「小学校外国語教育における学習者用デジタル教科書を活用した授業づくり」と題して、実践報告をいただきました。言語活動とICT活用のバランスの大切さや「読む、書く」指導についての課題、また、単元ゴールに向けて児童一人一人が学びを進めていくという複線型の授業について成果と課題をご発表くださいました。続いて、鳴門市里浦小学校の武知将人教頭先生より、「ICTを活用した新しい授業のカタチ」と題して、実践報告をいただきました。自己効力感を醸成することを大切に、課題を見つけて克服する、工夫して取り組む、根拠を明らかにして伝える等、目指す授業の在り方をご発表くださいました。ハイラブルという機器を活用し、児童のアウトプット可視化の手立てとするお話もあり、示唆に富んだ内容でした。

後半では、中京大学教養教育研究院 教授 泰山裕先生から「これから求められる授業のカタチ」と題してご講演をいただきました。「個別の知識ではなく概念的なものを」「自分なりに学びを進める」「授業は探究的に個別最適に」、社会の変化に伴い、学習者主体の学びを実現し、自律的な学習者を育てるための授業はどうあるべきか等、今後の外国語教育の在り方にも触れながらお話いただき、多くのご示唆をいただきました。



【トークセッションの様子】

トークセッションのコーナーでは、会場の皆様から登壇された先生方へのご質問をたくさんいただき、それに答えていただきながら協議を深めていくことができました。

参加者の皆様からいただいた「個別最適な学び、協働的な学びも含めてお話が聞けたことはよかった」「ICT活用について自分の中で深まり、全てが学びだった」などのお声は、今後の取り組みへの大きな力となります。登壇してくださった先生方、また、ご参加くださった皆様に心より感謝申し上げます。

（コーディネーター 竹内 陽子）

